

宗教学者 大田俊寛

資本主義的幻想と 反資本主義的幻想の呪縛

私は今年の三月、自身の二冊目の著作として、『オウム真理教の精神史——ロマン主義・全体主義・原理主義』（春秋社）を上梓^{じょうし}した。私はこれまで、宗教学の立場から、キリスト教思想を中心として研究を進めてきた者であるため、そのような私が、日本における仏教系の新宗教と見なされているオウム真理教を扱うということは、一見したところかなりの飛躍と受け取られたかもしれない。しかし私自身は、必ずしもそうは考えなかった。というのは、二〇世紀末の日本に現れたオウムは、いわゆる「近代の力

ルト」としての典型的特徴を示しており、そして近代という時代とそこにおける宗教の位置づけは、西洋の歴史のなかから、より具体的には、キリスト教の歴史のなかから生み出されてきたものだからである。同書においては、ロマン主義・全体主義・原理主義という西洋近代思想の諸潮流からオウムを読み解くという試みが行われている。これまで提示されてこなかった視点からオウムについて再考してみたいという方は、ぜひご一読いただきたい。

小欲知足と資本主義

さて、今回『サンガジャパン』の編集部から私に与えられたテーマは、「小欲知足」、すなわち、欲少なくして足るを知る、ということである。確かにこの言葉は、一つの理想を指し示したものとして、美しく響く。さまざまな欲望に惑わされることなく、自然によって与えられた矩のりに沿って質実に生きることができれば、それはどれほど清々すがすがしいことだろうか。

しかしながら、翻ひるがえって考えれば、積尊ねが涅槃はんに入る間際に説いたとされるこの教えを、現代を生きる日本人にそのまま適用しようとすることは、あまりにも無理があると言わなければならぬ。というのは、現代人は「資本主義」と呼ばれる経済の仕組みによって自らの欲望を充足させ、生活を成り立たせているからである。東洋古代で生まれた小欲知足という理想には、

当然のことながら、西洋近代で生まれた資本主義にまつわる現実には、その視野に収められていない。果たして現代のわれわれにも、小欲知足という理想に沿って生きることが、なお可能なのだろうか。

資本主義の巨大なシステムに組み込まれて生きる現代人の欲望のあり方は、実際には、小欲知足といった理想から程遠い状態にあることを認めなければならぬ。まず労働において現代人は、多数の部署に細分化された巨大な官僚組織の一部に配属され、しばしば過労死に追い込まれるほどの、過酷な禁欲的作業に従事することを余儀なくされる。しかしながら、資本主義のシステムがまったく禁欲的なものであるかと言えば、もちろん決してそうではない。資本主義の労働によって作り出される生産物はすべて、誰かに買ってもらうなければならない「商品」であり、それらは消費者の欲望を絶えず喚起させることを目的にデザインされている。この

ように、資本主義社会における現代人の欲望のあり方は、一方の労働においては、非人間的な単純作業の飽くなき反復や、顧客への奴隷的奉仕といった過酷な禁欲に支配され、他方の消費においては、当面必要でない商品でも隙あらば購入させてしまおうとするような、間断ない享樂の誘惑に晒され続けるといふものになる。禁欲と享樂の不愉快なまでの非対称性と不均衡性——それ自体としてすでにきわめてストレスフルなこうした環境こそが、現代社会における欲望の基本的なあり方なのである。それは、小欲知足の理想からいかに遠く隔たっていることだろうか。

しかしここでは、早急に結論を出すことは控えよう。現代社会における欲望の問題についてより深く考察するために、本稿では、近代資本主義のおよそ三〇〇年にわたる歴史が、その過程でどのような思想的変遷をたどってきたかということ、手短に概観してみることにはしたい。

それは、現代においてなお小欲知足が可能かという問題をあらためて考察するために必要であると同時に、オウム問題の本質の一端に触れることにもなるはずである。

資本主義と近代思想

現代のわれわれは、資本主義を自明のものとして受容し、その下で日々の生計を立てている。しかし振り返って考えてみれば、資本主義というシステムは、きわめて不可思議な存在である。まず第一に資本主義は、そのシステム全体を、誰かが明確な意図に沿って設計・発明したわけではないということが銘記されなければならない。資本主義は近代において、科学技術の加速度的発展、各種の通貨制度やそれに基づく信用創造方式の確立、私的所有権の法律的保護、株式会社という利益共同体の結成など、いくつもの要素が揃うことによって、初めてその十全

な姿を現した。そして、それらの要素一つ一つについては、特定の誰かによって設計・発明されたものと考えることができのだが、それらの要素の複合体として成立した資本主義については、その成立を特定の誰かの手に帰することができないのである。

一言で言えば資本主義は、どのような原因や意図によって生み出されたのかが明らかではなく、同時に、その運動が最終的にどこに向かうとしているのかも定かではない。われわれは、このような得体の知れないシステムの重力にいつの間にか絡み取られ、その運命に盲目的に身を任せている、と考えなければならぬだろう。資本主義の正体とは、いったい何なのか。近代の思想家たちは、この問いに積極的に取り組んできた。そうした一連の試みは、最初の明示的なものとしては、一八世紀の後半から一九世紀の初頭にかけて現れる。資本主義の歩みは、経済学という学問の歩みと軌を一にしている

と見ることができが、「経済学の父」と称されるアダム・スミスは『国富論』（一七七六年刊）において、市場経済のメカニズムについて次のように論じた。すなわち、諸個人が自己の利益を追求して行動することは、市場における需給のバランスによって自動的に調整され（いわゆる「見えざる手」）、結果として国民全体の利益を増進させることにつながってゆく。ゆえに国家は、経済への干渉を最低限にとどめ、その自由で自律的な発展を促すべきである、と。

スミスが提示した経済論は、ドイツの哲学者ヘーゲルにも大きな影響を与えている。ヘーゲルはその著『法の哲学』（一八二一年刊）において、経済的原理によって支配される市民社会の姿を「欲求の体系」として描き出し、その存在が家族や地域社会といった親密な共同体の紐帯を解体しながら、グローバルな規模にまで展開しうることをすでに指摘している。しかしながらヘーゲルによれば、「欲求の体系」として

の経済活動によって生み出される諸矛盾は、より高位の「人倫的実体」たる国家によって止揚される。そこで人々は、国家の指導に基づく行政措置によって公共の福祉を保障されるとともに、いったんは失った人間同士の絆きずなを取り戻すことができるのである。

このように一九世紀前半までの諸思想においては、資本主義の動向に対して、市場における需給の調整作用、国家による福祉政策、あるいは個人や社会に内在する道徳や倫理によってコントロール可能であるとする、全体として樂觀的な見解が支配的であった。しかしそうした傾向は、一九世紀半ば以降、徐々に変化してゆく。その原因としては、その時期から周期的に恐慌が発生するようになったこと、資本家と労働者の経済格差が拡大したこと、工場や職場における非人間的な経営管理の手法に対する反発が生じてきたことなどが挙げられよう。資本主義の運動は本当に制御可能なのか、あるいは、それ

は人間社会の真の豊かさや幸福を実現するものなのかということに関する、根本的疑義が発せられるようになったのである。

反資本主義の思想―マルクスとニーチェ

一九世紀後半に登場し、二〇世紀以降の世界に大きな影響を与えた、反資本主義の傾向を持つ思想家として、ここではマルクスとニーチェに触れておきたい。

まずマルクスは、近代における私的所有制の確立によって、少数の資本家による土地や労働設備の独占が生じ、その結果、労働者は巨大な生産機構に奴隷的に奉仕する存在に成り下がってしまふという、いわゆる「労働疎外」の問題に焦点を当てた。そしてマルクスによれば資本主義は、いずれ到来するであろう大規模な恐慌によって破綻はたんすることを運命づけられている。さらにその際には、私的所有の擁護や帝国主義

的政策において資本主義と結託してきた国家も、革命によってその存在を揚棄される。土地や労働設備は、その本来の所有者である労働者の手に返され、彼らが必要に応じて必要なものだけを生産する、共産主義的ユートピア社会が到来すると予見されたのである。

他方でニーチェの思想においては、一見したところ、資本主義に関する直接的な言及は希薄である。しかしその文明批判の背景には、資本主義の影響によって文学や芸術が商業化・通俗化を余儀なくされること、その生産様式によって人間精神の機械化・奴隷化が進行することに対する深い憂慮が潜んでいた。ニーチェは、機械化された経営管理のシステムに馴致され、商品化された文化的生産物を口を開いて受動的に享受する近代的大衆の姿を「末人」や「畜群」と呼び、激しく嫌悪した。そして彼は、自ら新たな価値を創造することのできる貴族的精神の持ち主を「超人」と呼び、「畜群」に対峙させ

たのである。

マルクスやニーチェの反資本主義論、その革命論や超人論は、二〇世紀に入っていよいよ影響力を増し、さまざまな社会運動に結びついていった。しかし彼らの思想が、資本主義的桎梏を超越した新たな社会、新たな人間精神のあり方を本当に生み出すことができたのかという点については、現状においては否定的に評価せざるをえない。むしろ両者の思想は、資本主義によって生み出される経済恐慌や社会格差以上の惨禍を、二〇世紀の世界にもたらすことになった。

ロシア革命を筆頭に、世界各地では数々の共産主義革命が引き起こされたが、それによって姿を現したのは、労働者の自治に基づくユートピア社会ではなく、特定の指導者の意志がすべてに優越する独裁体制であり、また、「反革命」と見なされる者を強制的に収容所に幽閉する、恐るべき管理主義国家であった。他方、

ニーチェの提示した「畜群か超人か」という二元論は、ナチズムの運動において人種論的に理解されるに至る。ナチズムの世界観においては、ユダヤ民族は劣等種族であり、同時に彼らは資本主義システムの発明者であって、そのシステムを巧みに操ることによって、ゲルマン民族の高貴なる血と精神を墮落させようとしていると考えられた。そしてナチズムは、アウシュヴィッツをはじめとする数々の強制収容所を建設し、ユダヤ人問題の「最終解決」として、その民族自体の絶滅を企図したのである。総体的に見れば、一九世紀後半に提示された反資本主義論や資本主義超克論は、二〇世紀において数々の国家社会主義に結びつき、全体主義的国家体制を成立させるに至った、と理解することができるだろう。

反資本主義論の残存

——ポストモダニズムと全体主義カルト

第二次世界大戦後から二〇世紀後半へ時代が推移すると、安易に資本主義を超克・揚棄しようとする試みが社会に甚^{はなは}だしい惨禍を巻き起こすということが次第に理解され、国家レベルでこれを実行に移そうという企図は影を潜めるようになった。しかしながら、マルクスやニーチェに由来する革命幻想・超人幻想が今や世界から一掃されたかと言えば、容易にはそのように見なしがたい。それらは主に二つの領域において、今もなお残存していると考えることができる。その二つの領域とは、「ポストモダニズム」と呼ばれる現代思想の領域と、オウム真理教を含む「全体主義カルト」の領域である。

本来であれば思想の領域においてこそ、マルクスやニーチェのヴィジョンは本当に社会や人類の未来を指し示すものなのか、そこには何か致命的な盲点や欠点が含まれているのではないかといった批判的検討が積極的に行われるべきであったが、不可思議にもそうしたことはほと

んど行われず、むしろ事態はきわめて屈折した展開をたどった。すなわち戦後の社会においては、商業主義化の波がさまざまな分野に深く浸透していったが、学問や思想の領域もその影響を免れることはできなかった。特に八〇年代以降の日本社会においては、出版社やメディアと結託した諸種の知識人たちが登場し、そして彼らは、マルクスの革命幻想やニーチェの超人幻想のさまざまなヴァリエーションを考案しては、「この社会の外に出られる」「今の自分とはまったく別の生のスタイルを獲得できる」といった扇動的文言を振り撒いて、多くの聴衆や読者を獲得していったのである。そこに現出したのは、反近代的・反資本主義的幻想を量産し、大衆に売りつけることによって資本主義に則った商売を成り立たせようとする、まさに「遂行的矛盾」と言うほかない歪んだ思想の姿であった。

これに対し、資本主義的な管理社会から逃れたい、あるいは、その淀んだ快樂に浸され

た世界から脱却したいという願望は、各種のコミュニティや新宗教の運動において、より率直に表現された。すなわちそこでは、一般社会から隔絶した独自の共同体をつくり上げようという試み実践されたのである。その一例としては、欧米のヒッピー・ムーブメントに端を発し、アメリカのオレゴン州に巨大なコミュニティ（ラジニシ・プーラム）を建設したバグワン・シュリ・ラジニシの活動、あるいは日本においては、独自の共産主義的理論に基づく農業ユートピアの実現を企図したヤマギシ会の活動などが挙げられよう。しかしこれらの共同体は、多くの共産主義国家がそうであったのと同様に、一部の指導者による独裁体制や、共同体の方針に背く者の強制排除・思想改造といった全体主義的性質を帯びることによって、崩壊や衰退へ向かっていった。

そして、ある意味でオウム真理教とは、全体主義的なカルトやコミュニティの極北に位置する

存在であつたととらえることができる。そこに集つた人々は、資本主義的な生のあり方に倦み疲れた人々、より具体的に言えば、資本主義における過剰な欲望の扇動、機械的で官僚主義的な労働組織の形態、そしてそれらの根底にあるアノミー的状况に深く疲弊した人々であつた。ゆえに彼らは、その「家畜」のような生から離脱して「超人類」に進化すること、資本主義の原理に支配された日本社会を捨て去り、「シンバラ」や「真理国」と呼ばれる理想世界を建設するために心身を捧げることを選び取つたのである。

教団の結成から地下鉄サリン事件に至るまで、およそ十年間にわたるオウム活動はきわめて多岐に及んだが、とりわけ注意を促しておきたいのは、特に九〇年以降のオウムにおいて、いったんは消え去つたかに見えた「ナチズムの亡霊」が甦り、彼らの思想や行動に憑いたかのように思われるということである。さ

まざまな局面で社会との衝突や対立を繰り返したオウム教団の内部では、かつてナチズムが主唱していた、ユダヤフリーメーソン陰謀論が次第に囁かれるようになった。すなわち、日本社会の政治・経済・教育・メディアといった諸分野は、ユダヤ資本の諸勢力や、その手先として動いている秘密結社のフリーメーソンによつてすでに支配されている。彼らは資本主義の運動を操作することによつて、日本人を物質的欲望へと縛りつけ、高い精神性を希求することのない家畜的主体に飼い慣らししまつていのである。日本人の大半はすでに、地獄界・餓鬼界・畜生界といった「三悪趣に落ちる」ことが運命づけられているため、彼らをすべて粛清して、その後には神聖なる「真理国」を再建しなければならぬ。そしてオウムは、畜群粛清というその目的を達成するために、かつてナチスが開発したサリンという大量破壊兵器に手を伸ばすことになつたのである。

革命でも、戦争でもなく

『オウム真理教の精神史』を公刊してからしばらく後、私はある雑誌社から企画を持ちかけられ、アーレフ元代表の野田成人氏と対談を行うことになった（『日刊サイゾー』WEB版）。野田氏は、昨年の三月に『革命か戦争か——オウムはグローバル資本主義への警鐘だった』（サイゾー）という書籍を公刊し、オウム教団における自らの経験を回顧するとともに、その出現を後押しした根源的原因が、グローバル資本主義が抱える問題にあったのではないかという考察を展開している。そして野田氏は、グローバル資本主義はやがて戦争によって自壊する危険性を孕^{はら}んでおり、それを避けるためには、革命によって社会のあり方を根本的に変える必要があると提言する。

しかしながら、野田氏自身がその著作のある

箇所において、「私はまだ、やはり洗脳されているのだろうか？」（一六五頁）と持論への疑義を呈しているように、革命か戦争かといった二元論は、なお根深くオウムの的であると言わなければならぬ。もちろん野田氏の考察においては、かつてオウムを支配した超人類への進化論や、神聖なる真理国といったユートピア論はすでに払拭^{はつしよく}されているが、資本主義の運動に身を任せて破局へと逢着^{ほうちやく}するか、もしくは革命によってその運命から逃れるかといった二元論は、かつてのオウムの思考と同型であると考えられるからである。私はその対談の場において野田氏に対し、「革命か戦争か」という二元論的思考からどうすれば逃れうるのかを模索することこそが、むしろ真のポスト・オウムの課題なのではないか、と申し上げた。しかしこの課題は、どれほどまでに困難なものだろうか。

まず私は、資本主義を早々に超克しようという考え方に対しては、これにまったく同意する

ことができない。すでに日本は、そして世界は、歴史上類を見ないほどの膨大な人口を抱え込んでしまっており、現存する人々の生命を維持してゆくためには、いかなる弊害がそこに含まれようとも、資本主義のシステムはなお必要であると考えざるをえないだろう。資本主義に基づく労働の集約化・合理化・流動化等のシステムが機能しなければ、われわれの生活のすべてが一瞬にして危機に瀕^{ひん}してしまうであろうことは、火を見るよりも明らかだからである。

しかしながら、安易に資本主義を超克しようかのような幻想的思考を捨て、資本主義の必要性と重要性をあらためて承認しさえすれば、幻想に支配されない現実的な物の見方ができるといふわけではない。なぜなら資本主義はそれ自体として、多分に幻想の力によって駆動しているシステムだからである。あらゆるものを貨幣価値という数値に還元してとらえる資本主義においては、貨幣が理論的には無限に存在しう

るのと同様、人間の快樂もまた無限に存在するという幻想を生み、それは同時に、お金さえ持っていればどんな欲望でもかなえられるという全能幻想へと結びつく——かつて堀江貴文が、金があれば何でもできる、人の心も買える、将来は不死の存在になることさえ可能である、と唱えたように『稼ぐが勝ち』光文社、六〇頁)。また、資本主義が絶えず人々の欲望や幻想を煽り立てる性質を持つこと、そして本稿においてポストモダニズムについて論じたように、それは「反資本主義の思想」すら商品に変えてしまふほど柔軟かつ狡知^{こうち}に満ちたものであるということ、これは、これまで見てきたとおりである。

われわれの何気ない日々の生活は、実はさまざまな幻想の陥穽^{かんせい}によって幾重にも取り囲まれている。ゆえに、冒頭で述べた「小欲知足」の理想を今日実現するためには、近代以降の世界においてそれらの幻想がどのようにして生じ、どのような惨禍を引き起こしてきたのかという

ことを、まずは可能な限り歴史から学ぶ必要があるだろう。資本主義的幻想と反資本主義的幻想という、対極的な陥穽のどちらにも落ちることなく、その狭間はざまを縫うように歩き続けること——それは、かつて仏教が示した「中道」の知恵を、現在に生かす方法の一つとなりうるのではないだろうか。